香月みと
MITO KAZUKI

乙女ゲーム世界で主人公相手にスパイをやっています

3

登場人物紹介
金城篤史
(かねしろ あつし)
2年生。
水崎の乳兄弟。
水崎誉
(みずさき ほまれ)
2年生。
財閥の御曹司。
ミシェル
学園内の教会に
やってきた神父。
月島優希
(つきしま ゆうき)
1年D組。
学園一の美少年。
日比谷和翔
(ひびや かずと)
詩織の従兄で、
クラス担任。
新見詩織
(にいみ しおり)
従兄の和翔から頼まれ、
この乙女ゲーム世界のヒロイン、
マリアの動向を探っている。
1年B組。
愛川マリア
(あいかわ まりあ)
乙女ゲーム世界の
ヒロイン。攻略対象の
全員をオトそうと
しているようで……?
1年B組。
土屋陽介
(つちや ようすけ)
1年B組。
マリアの幼馴染。
渋谷
(しぶや)
1年B組。
学級委員長を務める。
桂木鏡矢
(かつらぎ きょうや)
1年C組。武術に
秀でている。
火村稜
(かむら りょう)
1年B組。
若きデザイナー。

九月上旬　新学期が始まりました

夏休み中、私は神社の夏祭りで起きた事件に巻きこまれて怪我をした。擦り傷がほとんどだったけれど、一時は包帯まみれ。新学期の前日である今日になっても、完治はしていない。

夜、私は制服の長袖シャツを着てみた。まだ衣替えには早いけど、これなら腕の包帯も隠せるからね。ただ、正直暑い。

我が家に夕飯を食べに来ていた和兄は、心配そうな表情でこちらを見ている。彼は、私の従兄であり日比谷和翔という。私が通う聖火マリア高等学園で数学教師をやっている。

この世界がとある乙女ゲームの世界で、彼自身がゲームヒロインの攻略対象の一人だと告げられたのは春休みのこと。どうやら従兄殿は、そのゲームの世界に転生してしまったらしい。

和兄の前世の記憶によると、ゲームの期間は十二月末まで。それまでの間、彼がヒロ

CONTENTS

九月上旬
新学期がはじまりました
5

九月下旬
文化祭準備は迷走中です
82

十月上旬
嵐の予感です
135

十月下旬
文化祭に潜む悪意
261

インに攻略されないようにするのが私の役目だ。そのため私――新見詩織は、スパイとしてヒロインの動向を探っている。

夏祭りの事件も、ゲームイベントの一つだった。和兄は、自分のせいで私が怪我をしたと思っているみたいで、私の包帯を見るたびに、辛そうな表情をする。そんなに心配しなくても怪我はもうすぐ治るだろうし、長袖が暑いってこと以外に問題はないんだけど。

「……明日、その格好で行くのか？」

苦々しい表情で言った和兄に、私はうなずく。

「怪我を見せつける趣味もないしね」

夏祭りの一件――私と一年D組の月島美少年が他校生とのトラブルに巻きこまれたことは、少し噂になっているらしい。最後には、警察と救急車まで来たからな。お祭りには聖火マリアの生徒もけっこういたし、仕方ない。だけど、明日いろいろと聞かれたら嫌だなあ。

□ ■ □

さて、新学期である。

委員長と私はちょっと早めに登校し、職員室にやってきた。

本日、席替えをやるとのことで、その準備のために和兄から呼ばれていたのだ。彼は私のクラス、一年B組の担任でもある。

短い朝礼の間に席替えをしなければならないので、私たちは和兄と簡単に打ち合わせを行った。学級委員って大変だよね。

打ち合わせの後、教室に戻った委員長と私は、席替え用の簡単なクジを作成することにした。空のティッシュボックスに折りたたんだクジを入れただけの、楽チン仕様のものだ。

「席替えか……、僕としては、後ろの席は困るんだけどね」

今は前の方の席に座っている委員長が、そうコメントする。私は首をかしげた。

「どうして？　後ろの席の方が人気あると思うけど」

「メガネを忘れたら、黒板がまったく見えないから。教卓の前あたりを自分の指定席にしておきたいくらいだよ」

「委員長がメガネ外すことなんてあるの!?」

「僕だって寝る時は外してるよ」

委員長は苦笑する。そりゃ、そうか。委員長の顔はメガネまでセットな気がしていたので、思わず驚いてしまった。

「そっかー。たまにはメガネを外して、イメチェンしてみるのもいいんじゃない？　目が悪いなら、コンタクトにしたら？」
「いや、やめとく。メガネがないと、僕として認識してもらえるかどうか怪(あや)しいしね」
それもどうかと。
委員長と他愛のない話をしていると、B組の生徒たちが登校しはじめた。そして、朝礼の時間。クラスにやってきた和兄は、私の方をちらりと見た。席替えの準備は終わっているか、ということだろう。私がこくりとうなずくと、和兄は大きな声で言った。
「席替えするぞー」
その瞬間、クラスがワッと沸(わ)いた。
学生にとって、席替えは一大イベントの一つだ。クラス内に気になる子がいる場合は、特に。あの子の隣の席に座りたい……なんて甘酸(あまず)っぱい願望があると、そわそわしちゃうよね。私も、なんとなく落ち着かない。別に、近くの席になりたい子がいるわけじゃないんだけど。
「そういうわけなので、席替えです。席の希望については、事情がある場合のみ受けつけますが、基本的にはクジで決めます」
委員長はそう言って、用意しておいたクジの箱をみんなに見せた。
「クジを引く順番は、窓側と廊下側の最前列に座っている人でジャンケンして、勝った

方からにします。僕と新見さんは、最後に残ったクジを引く予定です。ただ僕は目が悪いから、後ろの席だった場合、最前列か教卓前の人とトレードしてもらいたいんだけど、いいかな？」
教卓の前に座りたい人なんていないのか、委員長の希望はすぐに通った。委員長はクジを引く意味が全然ないよね、それ。
さて、ジャンケンに勝ったのは、この乙女ゲーム世界のヒロインこと愛川(あいかわ)マリア嬢だ。彼女は、廊下側の最前列に座っていたのである。うん、さすがゲームのヒロイン。……まぁ、別にヒロインだからジャンケンが強いってわけじゃないかもしれないけど。マリア嬢はさっそくクジを引き、中央列の後ろ寄りの席に決まった。
マリア嬢の席が決まると、男子生徒たちの目の色が変わる。マリア嬢の隣の席になれるか、さぞかしドキドキしていることだろう。何しろ彼女は学園一の美少女。お近づきになりたい男子は多いのだ。
マリア嬢の隣の席になったのは、彼女の攻略対象の一人、火村(かむら)くんだった。彼は若きデザイナーでもある。
反対側の隣の席は、同じく攻略対象である土屋(つちや)少年になるかと思っていたんだけど、彼は教卓前のクジを引いていた。常日頃、デザイナーくんがマリア嬢にちょっかいをかけるのを見て、顔をしかめている土屋少年である。彼の今の心中は穏やかじゃないはず。

なお、マリア嬢の友人である祭京子嬢は廊下側の席に、私の友人である佐々木裕美ちゃんは中央列の後方左寄りの席になった。裕美ちゃんもメガネをかけているけれど、委員長ほど目が悪くないのか、前の席を希望したりしない。

そして最後に残ったのは、窓側の最後尾の席と、その隣の席だった。どちらの席からも、マリア嬢の様子がよく見える。これは、授業中のマリア嬢の動向を探れと、天が私に告げているのではないか。いや、気のせいだろうけど。

「一応、引く？」

委員長に尋ねると、彼はにっこりと笑った。

「新見さんは引いて。僕は残った方のクジを交換してもらうから」

委員長は、教卓前の席に決まった土屋少年を見やる。私はクジを引き、窓側最後尾の隣の席に座ることとなった。

さて、九月上旬の私の仕事は、攻略対象たちのマリア嬢に対する好感度をチェックすることである。和兄いわく、乙女ゲームには好感度というものがあるらしい。これは、攻略対象たちがどのくらいマリア嬢に好意を持っているかの目安になるものだ。

夏休みの間、マリア嬢と遭遇することはあったけれど、さすがにすべての動向を探ることはできなかった。攻略がどの程度進んでいるかを確認しないといけない。

和兄は、攻略対象たちがマリア嬢をどう呼ぶかが、好感度をはかる基準の一つになると言っていた。しかし、これがなかなか難しい。そもそも会話中でなければ分からないし、その際に必ず名前を呼ぶとも限らない。他にも、好感度が上がるとマリア嬢を見つめる際の表情が変化すると聞いたが、果たして私に分かるかどうか。

ひとまず今日はマリア嬢の後をつけて、攻略対象と接触した時の様子を観察してみようと考えている。

まずは一人目。マリア嬢のお隣の席になった、デザイナーくんこと火村くん。

一時限目の直前、「よろしくね、マリアちゃん」と微笑んだデザイナーくんは、一見したところ夏休み前と変化がない。呼び方も変わらないし、瞳に熱っぽいものが混じっているわけでもない。けれど、否定的な感情も伝わってこないので、順調に進行中という感じだ。

授業に向けて机にノートを広げたデザイナーくんは、思い立ったようにマリア嬢に顔を寄せ、声をかける。私はさっそく新しい席の恩恵にあずかった。ここからは、マリア嬢の様子がよく見えるだけでなく、声もよく聞こえるのだ。

「お隣になった記念に、何かプレゼントしてあげようか」

デザイナーくんが言うと、マリア嬢はくすっと笑った。

「たとえば、どんなもの？」

「そうだなあ、オレの真心」
そう言ってデザイナーくんはノートを一枚ちぎり、器用に折っていく。そうして完成したのは、可愛らしいペンギンだった。デザイナーくんはそのペンギンのくちばしの先で、マリア嬢の手の甲をツンツンとつつく。
すると、マリア嬢はぷっと噴き出した。「あ、これ絶対に素だ」という笑みを浮かべている。こういう姿を見ると、マリア嬢って本当に可愛いと思う。
「可愛いー。なんだか本物のペンギンが見たくなっちゃった……、ねえ、火村くん。よかったら今度、水族館に行かない？　ペンギン見るの、付き合ってほしいなあ」
「えー？　んー、そうだね。日曜日じゃなければ、いいよ」
くすくすと笑い合うマリア嬢とデザイナーくん。
なんというサラッとした誘い方であることよ。これって、あれかな。和兄が言ってた、ヒロインと攻略対象の友達デートってやつ？　教室で、なんとまあ大胆な。
ちらりと横の席をうかがうと、土屋少年は自分のカバンをあさるのに必死で、二人の様子に気づいていないようだった。教科書が見当たらないのだろうか……っていうか、どれだけ乱雑に入れてるんだ。普段から中身を整理しておくことをすすめたい。
次の観察対象は、そんな土屋少年である。
二時間目前の休み時間、マリア嬢は土屋少年の席の近くにやってきた。彼女の姿を見

て、土屋少年は少し嬉しそうに声をかける。
「よう愛川。……夏休み中は、わざわざありがとな」
「ううん。つっくんがインターハイで優勝する瞬間が見られてよかったよ。前の大会の時には、応援ができなかったから」
マリア嬢は土屋少年の前の席に座ると、はにかんだみたいに笑った。
「京子ちゃんがね、スポーツ雑誌につっくんのインタビューが載ってるって見せてくれたよ。すごいね、つっくん」
「あー……インターハイ特集だったからだろ。優勝者のみんなにインタビューしてるって言ってたぞ。マイナー誌だから、たいしたことじゃ――」
「たいしたことあるよー。幼馴染が雑誌に載るなんて！　わたし、ビックリしちゃった。……でも、つっくんの口から教えてくれたら、もっとよかったのに」
拗ねたような口ぶりで言うマリア嬢。土屋少年は動揺したのか、慌てて口を開いた。
「い、いや、だって、インタビューが本当に載るのか分からなかったし……、その、見本の雑誌は家に届いたけど、発売日だって知らなかったんだ。別に内緒にしてたわけじゃねえから」
「ふふ、分かってるよっ」
ふわりと微笑んで、マリア嬢は言った。

「約束、したもんね。まだまだ活躍を見せてくれるんでしょ？　応援してるから」
「……おう」
土屋少年は頬を赤く染めて、力強くうなずいた。
二人の様子を密かに観察していた私は、さっそく今のやりとりについて考える。呼び名に変化はないし、特別進展があったようには見えないが、後退している気配もない。順調そのものといった具合だ。
ちなみに土屋少年は、八月に開催されたインターハイの水泳競技で優勝した。今朝、京子嬢が雑誌を片手に宣伝していたので、私も後で見せてもらおうと思っている。
さて、三人目である。
次の休み時間、私は移動をはじめたマリア嬢の後をつけた。一年D組の教室を覗いたマリア嬢は、月島美少年が欠席していることを知って、あからさまに肩を落とす。しかし、ここでヘコたれるマリア嬢ではない。彼女は、そのまま一年C組の教室に向かった。
C組は、攻略対象の一人である桂木くんのクラスだ。ふむ、四人目は桂木くんか。
武道の心得があり、綺麗な顔立ちをした桂木くんは、クラスの女子からとてもモテるらしい。七月頃、私は桂木くんとの仲を誤解され、三条さんという女子生徒から嫌がらせを受けた。彼女以外にも、たくさんの女子が告白しては断られているという。
マリア嬢は、にこにこしながらC組の扉を開けた。その瞬間、三条さんをはじめとする女子たちが、一斉に彼女を睨みつける。……姿を見せただけで睨まれるとは、よほど敵視されてるな。
だが、マリア嬢はそんなことなど気にしない。桂木くんを見つけると、嬉しそうに声をかけた。
「桂木くーん！」
にこやかに手を振るマリア嬢。当の桂木くんは不思議そうな顔をすると、マリア嬢のそばまでやってきて尋ねた。
「愛川、何か用か？」
「あ、ふふふっ、わたしの名前、やっと覚えてくれたんだ？」
「……？　ああ……新見の知り合いだろう」
「ううーん、その覚え方はちょっとだけど……。ねえ、桂木くん。妹さんって、髪飾りとか好き？」
「……どうだろう？」
「わたしね、小さいころにいろいろと髪飾りを集めてたの。でも、使わなくなっちゃったやつがたくさんあって。もしよかったら、妹さんに使ってもらいたいなあって思ったんだけど」
「……？　ああ」

「今度持っていきたいから、おうちにお邪魔してもいい？」
……スゴイ!!　さすがだ、マリア嬢！　なんて要望の仕方だよ！
妹ちゃんの話題を出して、C組に来たのは桂木くん目的じゃないんだよ、と示しながらもおうち訪問とは！　というか、マリア嬢はどこで桂木くんの妹ちゃんと会ったんだろう。夏休み中かな。そういえば夏祭りの日には、迷子になった妹ちゃん探しをしてたっけ。
会話を聞いていたC組女子は、鬼の形相をしていた。正直言って、怖い。
「あー……家は、ちょっと」
桂木くんの返答に、マリア嬢はしょんぼりと肩を落としてうつむいた。しかし、すぐにっこりして顔を上げる。
「なら、今度持ってくるから、妹さんに渡してあげてねっ！」
爽やかに手を振って、マリア嬢は教室を後にした。引き際があっさりしているところは、すごいと思う。
廊下を歩くマリア嬢は、ぽつりと呟いた。
「友好度がもう少し足りないかな。テコ入れしないと……」
うむむむ。マリア嬢、廊下の真ん中でその発言はうかつではないかね？　私のような人間が、いつ耳を澄ましているとも限らないのだ。まあ、この学園に私みたいな人間が

何人もいるとは思わないけど。
ちなみに、友好度も乙女ゲームの大事な要素の一つらしい。これを上げて攻略対象と仲良くなると、好感度も上がるんだとか。
「で、新見は何してるんだ？」
マリア嬢の後ろ姿を見つめながら廊下をゆっくり進んでいた私は、背後から声をかけられた。振り返ると、C組の教室の前に桂木くんが立っている。
「えっ、いや、別に。歩いてるだけだよ？」
慌てて答えると、桂木くんは少し考えこむようにして言った。
「妹が、新見にまた会いたがってるんだ。暇だったら、今度遊びにきてくれ」
……おや？　今まさにマリア嬢の訪問を断ったところなのに、家に私を呼んでもいいの？
私は首をかしげつつ答える。
「私も妹ちゃんには会いたいし、機会があったらね」
そんなこんなで休み時間は終わった。
午前の授業はさくさく進み、あっという間に昼休みだ。マリア嬢が向かった先は、西校舎であった。だが、彼女の目論見は外れたらしい。図書室と花壇をチェックしていたが、誰もいなかったのだ。

場所から推察すると、マリア嬢が探していたのは金城先輩に違いない。生徒会会計である金城先輩は、生徒会長である水崎先輩と一緒に生徒会室にいると思う。だけど、私がそれをマリア嬢に教えるわけにもいかない。あくまで私は、彼女の後をつけている身。マリア嬢は西校舎をぐるっと一回りし、一年生のクラスがある東校舎へと戻っていった。五人目、六人目の攻略対象と接触するのは、諦めたようだ。

午後の授業の間は、特に何も起こらなかった。マリア嬢は、時折デザイナーくんと話していたが、真面目に授業を受けている。

そして放課後。マリア嬢は中央校舎に向かった。数学の教科書とノートを持っているから、職員室にいる和兄のもとに、授業の質問をしにいくのだろう。七人目は、和兄か。これで攻略対象がすべて出揃った。

こうして一日追いかけてみると、マリア嬢ってマメだなと改めて感心してしまう。

今日はこれから、文化祭についての会議がある。そのため、クラスの副委員長である私は、これ以上彼女を追うことができない。仕方がないので、和兄にメールをする。

『マリア嬢が中央校舎に向かってる。数学の教科書、持ってた』

すると、すぐに返信があった。

『了解』

見た目はホストみたいだけど、和兄はいたって真面目な教師だ。教科書持参でマリア

嬢に来られたら、逃げられないだろう。このメールで、マリア嬢との遭遇が回避できるといいんだけど。

和兄にはゲームについての記憶だってあるし、マリア嬢にオトされたくないと思っている。そんな彼の好感度の確認は、私がしなくても本人が一番分かっているに違いない。

私は会議に向かうべく、移動をはじめた。

聖火マリア高等学園では、十月に文化祭がある。よって、九月はその準備期間にあてられる。

各クラスの学級委員に加えて文化祭実行委員が会議に参加し、文化祭の準備を取りまとめる。正直、目の回るような忙しさだ。ちなみにＢ組の文化祭実行委員は、土屋少年である。

土屋少年とは隣の席になったので、話す機会が少し増えた。そして気がつけば、二人してマリア嬢の様子をチラチラうかがっていた。もちろん私はマリア嬢の様子を探っているわけだけど、土屋少年は気になる女の子についつい目がいってしまうという状況だろう。

彼女が楽しそうにデザイナーくんと交流しているのを見るたびに、彼は眉をひそめていた。そのためか、私の席の周辺は、空気がややピリピリしている。

無自覚ながらマリア嬢に夢中の土屋少年は、私が彼女をチェックしていることには気づいてなさそうだ。今後も、なるべく気づかれないようにしたい。

文化祭の会議は長引いた。

第一回である今日の会議の内容は、文化祭規約の通達。公序良俗に反する行いをしちゃダメだという注意の他に、これまでの文化祭がどんな感じであったかなどが説明された。一年生にとっては、はじめての文化祭である。質問が飛び交って、長引いてしまったのだ。

今後は、この会議で決めることが山のようにある。各クラスや部活の出し物・模擬店の内容、講堂や教室の使用権、当日の運営についての役回りなどなど……気が遠くなりそうだ。

まずは次の会議までに、クラスの出し物の希望をまとめて、提出しなければならない。それが決まると、各クラスや部活で文化祭の準備に取りかかることができる。

出し物・模擬店の希望は、無条件に通るわけではない。その年ごとに規則が定められていて、それに反することはできないのだ。毎年似たりよったりの内容だけど、食中毒が世を騒がせた翌年には、飲食系の模擬店の規則がものすごく厳しくなって、希望は激減したそうな。

また、文化祭は文化部にとって年に一度の晴れ舞台。そのため、文化部の希望が優先されるらしい。クラスで出し物や模擬店の希望を決める際、内容がかぶらないように

留意してほしいということで、各部の活動内容資料も配布された。とはいえ、一行でまとめられたこの活動内容が、参考になるかどうかは不明である。

さて、会議が終わると、私は委員長と土屋少年と一緒に教室へ戻ることにした。委員長と私はすぐ帰宅できるようにカバンを持参していたんだけど、土屋少年は教室に置きっぱなしだという。急いで帰らないといけない用事もないので、彼に付き合うことにしたわけだ。

「Ｂ組の出し物は、どうなるかな」

「そうだなあ。喫茶店を希望するクラスは多そうだよね。家庭科室の使用許可を取ったりするのも面倒だし、オバケ屋敷あたりに誘導したい」

私の言葉に、委員長がそう答えた。

「ビンゴゲームとかは？　私、ゲームのセット持ってるんだけど」

「ビンゴだけ延々とやるのも、どうかなあ。他にも何かないと……。それにしても、どうしてみんな、あそこまでメイド喫茶に興味があるんだか」

委員長が呆れたように言う。さっきの会議で、喫茶店を希望した場合のウェイトレスの衣装について、かなり質問があったのだ。ネコ耳はありか、スカートの長さはどこまで短くてもオーケーか、お客さんの手を握るのは大丈夫か、などなど。公序良俗に反する行い、とやらの基準の確認だね。

「委員長はメイド嫌い？」
「というよりも、この場合のメイドって、メイド風衣装のウェイトレスだろう。『おかえりなさいませ、ご主人様』と言うだけのメイドじゃ、面白みがない。衣装を用意するのも大変だし……。新見さんのバイト先くらい本格派な衣装が見られるならともかく」
「新見のバイト？」
委員長の言葉に、土屋少年は首をかしげた。
私は夏休みに、『にゃんにゃんカフェ』なる喫茶店で短期間バイトをしていたのだ。かの喫茶店の給仕衣装は、ネコ耳尻尾つき。マリア嬢も一日だけバイトをしたのだが、彼女のネコ耳ウェイトレス姿は本当に可愛らしかった。写メっておけばよかったかな。
私がマリア嬢のネコ耳ウェイトレス姿を思い出していると、委員長は携帯電話を取り出し、何やら操作して土屋少年に画面を向けた。
「これ」
「っ!?　なんで持ってんの、そんなの!?」
携帯電話の画面には、ネコ耳ウェイトレスになった私の写メが表示されている。
「佐々木さんがくれた」
「裕美ちゃんっ!?」
そういえば、裕美ちゃんには写真を撮られていた。それにしたって、委員長に送ると

は……まさかの展開だよ。
「へー。似合うんじゃねえ？」
写メを見た土屋少年の反応は、非常に淡白だった。いや、熱く反応されても困るんだけどさ。
「まあ、そういうわけだよ。中途半端な出来のメイド喫茶をやるくらいなら、別のものがいい。オバケ屋敷とか」
委員長は、再びオバケ屋敷を強調する。もしかしたら、彼は単にオバケ屋敷がやりたいだけなんじゃないだろうか。人を驚かせるのとか、好きそうだし。
「新見さんは、『ネオ・キャンドル』のフォローも忘れないであげてね。早めに参加希望を出さないと、講堂を使えなくなる可能性もあるし」
ちなみに『ネオ・キャンドル』とは、クラスの男子四人によって結成されたバンドである。文化祭でライブをするために、彼らは日々、練習に励んでいる。
「うん。春からずっと準備してたのに、発表できないなんてことになったら可哀想だもんね」
有志による出し物は、クラスや部活の出し物とは別枠扱いになる。文化祭では、クラスや部活の出し物の方が優先度は高い。そのため、それらが決定した後、残りの枠は早い者勝ちで決まっていくらしい。参加希望用紙を提出するタイミングが重要なのだ。

私がうなずくのを見て、土屋少年は不思議そうに尋ねてきた。
「そういや、なんで新見があいつらのフォロー役なんだ？　別にマネージャーでもないのに」
「結成した時に、たまたま同席してたからかなあ。合宿にも参加したしね」
私が言うと、土屋少年はみるみる表情を曇らせた。
「新見もいたのか」
会議前に雑談していて判明したのだが、土屋少年は、マリア嬢が『ネオ・キャンドル』の夏合宿に参加したことを知らなかったらしい。夏休み明けに漏れ聞こえた噂を耳にして、驚いたという。とはいえ七月の出来事を九月になってから蒸し返すこともできず、モヤモヤしているようだ。
「他にも京子ちゃんがいたよ。引率は日比谷センセーで。学園での合宿だったから、特に何もなかったけど」
私がそう言うと、土屋少年はホッとした顔をした。ここまで顔に出ているというのに、本当にマリア嬢への気持ちを自覚してないんだろうか。
「どう思う？　これ、無自覚なのかな」
委員長に小声で尋ねると、彼は私の言いたいことが分かったらしい。「どうだろうね」と呟いて、笑みを浮かべた。

そうこうしているうちに教室へ到着し、土屋少年はカバンを回収した。あとは下校するのみだ。
当然、土屋少年も駅に向かうのだとばかり思っていたら、彼は生徒用の駐輪場へ向かった。
「自転車通学なんだ」
「へえ。自転車通学の人、はじめて見た」
生徒の大部分は、電車かバスを利用して学園に来ている。しかし、公共機関を使うのに不便な場所に住んでいる生徒は、自転車通学をすることも可能だ。駐輪スペースに限りがあるので、四月に申請をしなくちゃいけないんだけどね。
「もしかして、トレーニングも兼ねてたりするの？」
「いや、家が駅から遠いっていうのと、満員電車が苦手なだけ」
熱心に取り組んでいる部活の延長なのかと思いきや、そんなことはなかった。
それじゃあ、と手を振り、土屋少年は走り去っていく。結局、委員長と二人で駅に向かうこととなった。
のんびり歩いていると、委員長は私が長袖シャツを着ている理由を尋ねてきた。どうやら、ずっと気になっていたらしい。私が答えると、彼は少し痛々しそうな表情を浮かべた。

「お祭りの日は大変だったね」
「まあね……。でも、学園でいろいろ聞かれなくてよかったよ」
噂になっているという話だったが、クラスでそれが話題にのぼることはなかった。
「ところで、あの時に着ていたのって自前の浴衣？」
「は？」
奇妙な質問だな、と私は首をかしげた。夏祭りの日に着ていたのは、菖蒲柄の浴衣である。私は毎朝ジョギングしていて、その時によく顔を合わせるおじいさんが譲ってくれたものだ。
「そうだけど、どうして？」
「いや、前に同じ柄の浴衣を見た覚えがあってさ。新見さんが着てるのは、ちょっと違和感があったというか……」
「浴衣って似たような柄が多いし、同じに見えることもあるんじゃない？」
「それもそうだね。よく似合ってたし、僕の気のせいだろうな」
それにしても、違和感とはどういう意味だ。菖蒲柄は私のイメージじゃないってこと？でも似合ってたんだよね？
「……どんな浴衣なら、違和感がないの？」
そう聞いてみると、委員長は少し考えこんだ。

「そうだな……金魚の柄とか？」
私が子供っぽいとでも言いたいのだろうか。っていうか、やっぱり菖蒲柄は似合ってなかったのか。ちょっとショックだ。
とはいえ、金魚柄の浴衣もいいよね、可愛いと思う。金魚と一緒に水流が描かれているデザインだと、なお涼しげだ。
「そういえば、委員長は着てなかったね。男の子って、あまり浴衣を着ないの？」
「男同士でお祭りへ行くのに、浴衣着るほど気合入れてるヤツは、そんなにいないんじゃないかな」
それもそうか。
駅前の繁華街にたどり着いたあたりで、頬にポツポツとあたるものがあった。雨だろうか。
空を見上げてみると、どんよりと雲が広がっていて、本格的に降り出しそうな気配が漂っている。
「激しくなるかな」
委員長は不安そうに呟いた。私は折り畳み傘を持っているから、問題ないんだけど。
「駅まで急ぐ？」
走れば、一分ほどで駅に着く。とその時、委員長の肩越しに見覚えのある人影を見つ

けた。私は思わず目を見開く。

それは、ゲームセンターに入っていこうとするマリア嬢の後をつけるチャンスである。状況から推察すると、攻略対象との放課後デートをしている最中なのではないだろうか。お相手は誰だ？　とりあえず土屋少年ではなさそうだな。

よし、委員長とはここで別れよう。そう思っていたのだが、私がうかつにもゲームセンターを凝視していたせいか、委員長が振り返ってしまった。

「急ぐより、雨宿りしてこうかな。たぶん、しばらく待っていれば上がるはずだから。新見さんもどう？」

彼はゲームセンターを指差して、微笑んだ。

実は私、ゲームセンターにはあまり入ったことがない。うるさそうだし、店内が暗くてタバコ臭いイメージがあったのだ。でもこのゲームセンターは、天井が高くて明るい雰囲気だった。店先に並んでいるのはクレーンゲームで、そこまでうるさくもない。委員長にそのまま感想を伝えると、彼は笑って言った。

「ああ、新見さんがイメージしてるのって、対戦ゲームなんかがずらっと並んでる光景じゃない？　ああいうゲームは、二階とか地下にあるんだよ。一階から照明を落としてると、新見さんみたいな女の子は入りづらいから」

どうやら委員長は、よくゲームセンターに足を運んでいるようだ。その後も、いろいろと説明をしてくれる。

「クレーンゲームは、お店にとって大事な収入源だしね。力を入れてるゲームセンターは、カップルや家族連れも入りやすくするために、店作りをしてるんだよ」

詳しいな、おい。そうツッコミを入れたくなった時、クレーンゲームの前に立つ二人組を発見した。マリア嬢と水崎先輩である。二人の前髪からは、わずかに水滴が落ちていた。

私と委員長も歩いてやってきたが、ほとんど濡れていない。なのに、一体どういう理由でそこまで濡れたのか。つくづく分からない。

私は委員長がコインゲームで遊んでいる間、二人の様子をうかがうことにした。

水崎先輩は、携帯電話を胸ポケットにしまいながら言った。

「今、車がこっちに向かっている。巻きこんで悪かったな」

「いえいえ。おかげで、水崎先輩と雨宿りできるんですから」

「……しかし、けっこう濡れてしまっただろう？」

「大丈夫ですよ。それに、先輩だってそんなに濡れて……。風邪を引かないでくださいね？」

マリア嬢は少し困ったように微笑んだ。どうやら濡れる事情があったらしい。これだ

けの会話では、何があったのか推察できないけど。
マリア嬢は、クレーンゲームのぬいぐるみを興味深げに覗きこんだ後、上目遣いで言った。
「水崎先輩は、ゲーセンに来たことありますか？」
彼は首を横に振る。
「ないな。いつも車だから、帰宅時に寄り道はしない」
まあ、そうだろう。マリア嬢の連れが水崎先輩と気づいた時、私は心底驚いた。周囲には、いつも彼に群がっているファンクラブの女子生徒たちもいない。マリア嬢がどうやって水崎先輩をここに連れてきたのか、その方法が気になる。
「なら、一度やってみません？」
マリア嬢の挑戦的な笑みに、水崎先輩は眉根を寄せた。
「おまえ、オレ様がこんな安物を欲しがると思うのか？」
「景品が欲しくて、やるんじゃないですよ。クレーンで取るのが面白いんです。さ、どうぞ」
水崎先輩はしぶしぶといった顔で、クレーンゲームに百円玉を入れた。
先ほどの委員長の説明によると、ゲームセンターのクレーンゲームは、入り口付近にあるものほど難易度が高くなっているのだとか。見栄えがいい景品を表に置いて、客を引き寄せる。しかし、なかなか取れないため、客はつい何度も挑戦してしまうというわ

けだ。
ゲームセンター素人である水崎先輩の腕前やいかに。結果、クレーンはぬいぐるみに掠りもしなかった。
ええかっこしいの水崎先輩は、イラッとしたらしい。眉をひそめて、再び百円玉を投入した。しかし、またも失敗。その後、何度挑戦しても、一向に成功する気配はなかった。
そんな水崎先輩の様子を、マリア嬢はにこにこしつつ見ている。ムキになる水崎先輩と、結果を分かっていながら見守るマリア嬢。……マリア嬢、ゲームセンターの回し者じゃないよね？
「くっ……、今のは惜しかった！　もう少しだったのに……。おい、名誉会員、これを百円玉に替えてこい。銀行くらい、まだ開いてるだろう」
高そうなブランド財布の中には、もう小銭がないらしい。悔しそうな表情を浮かべると、一万円札を数枚マリア嬢に手渡した。銀行の窓口は、とっくに閉まってるよ。っていうか、マリア嬢をどこまで行かせる気なんだ。
「一万円札なんて渡されても困ります。何回やるんですか……。それに、そこに両替機がありますよ？」
「両替機？　こんな店の中に？　なんのためだ」
「そりゃあ、先輩みたいに熱くなった方のためです。……替えてきます、千円分でいい

ですよね？」
「構わん。急げ」
水崎先輩はクレーンゲームのぬいぐるみを睨(にら)みつけながら言った。目を離したら獲物が逃げるとでも思っているようだ。
マリア嬢が戻ってくると、水崎先輩はさっそくゲームを再開する。
それから数千円を使った結果、獲物は水崎先輩の手に渡った。
大きくて、ちょっとブサイクなぬいぐるみである。水崎先輩の言うとおり、さほど質の良いものではないだろう。けれど、彼はたいへん満足そうに笑った。
「ふん。こうして見ると、なかなか愛嬌(あいきょう)のある顔立ちをしているじゃないか。よし、おまえ、特別にオレ様の寝室に招待してやろう」
ぬいぐるみに語りかける水崎先輩。そんな彼を見て、マリア嬢はくすくすと笑った。
「カワイイとこ、あるんですね」
水崎先輩の顔が赤くなる。カワイイと言われたのが心外だったのか、狼狽(ろうばい)した声を上げた。
「だっ、誰がだっ……」
水崎先輩の様子に、マリア嬢はさらに笑った。微笑(ほほえ)ましい光景である。
その後、二人はゲームセンター前に停まった車に乗りこみ、去って行った。そういえば、

先ほど水崎先輩は車が向かっていると言ってたな。こんな繁華街まで乗り入れるなんて、迷惑な車である。やたらゴツイ黒塗りの車で、ヤクザ映画に出てきそうなデザインだった。
マリア嬢の観察を終えると、私は委員長の姿を探す。果たして彼は、すぐに見つかった。太鼓のゲームで、フルコンボを達成したところだったのだ。まわりに人だかりができている。すごいな、委員長。水崎先輩とは一味違う。
それから委員長は、数回挑戦したクレーンゲームですべて成功し、射撃ゲームではオールクリアをしてみせた。いったい、どれだけゲームをやりこんでいるのか。小一時間、問いただしたいほどの腕前である。
唖然(あぜん)とする私に、委員長は言った。
「新見さんもやる？」
「その腕前を見せられてやる気になる人間がいたら、どうかしてると思うね」
それに、お小遣いを無駄に消費するわけにはいかないのだよ。
最後まで見物に徹した私は、委員長からクレーンゲームのぬいぐるみを一つ進呈してもらった。水崎先輩が取ったものと同じキャラクターのようだが、大きさはこちらの方が小さく、手のひらにおさまるサイズで可愛らしい。折り畳み傘のストラップにでもしよう。
「しかし、こんなに取れるなんて、すごいね。委員長の部屋は、ぬいぐるみでいっぱい

なんじゃない？」

委員長のクレーンゲームの腕前は、すさまじかった。一回のゲームで、なぜか二つも三つも取れるのだ。水崎先輩並みにお金を投入したら、いったいいくつ取れてしまうのだろう。

「部屋には置いてないな。誰かにあげたり、バザーに出したり……、ああ、そっか」

委員長はポンと手を叩いた。

「新見さん。文化祭で、これを景品にしよう」

「は？」

「家に、いらないぬいぐるみが山ほどあるんだよ。そろそろ処分したいと思ってたところだし、ちょうどいい。適当な理由をつけて、景品として配ることにしようよ」

「まだ出し物が決まってないんだけど。景品つきって、何するの？」

しかし私の問いかけは聞こえなかったらしく、委員長はいかにすればオバケ屋敷に景品をつけられるかを検討しはじめた。制限時間内にクリアした場合に……などと、ぶつぶつ言っている。この調子じゃ、少なくともうちのクラスが喫茶店になることはないだろう。もうこの際だから、縁日の屋台でもやる？

その後、雨は本降りになり、私たちはゲームを切り上げて帰ることにした。

駅まで委員長を入れてあげようと、私は折り畳み傘を広げる。しかし、彼もカバンか

ら折り畳み傘を取り出した。なんだ、持ってるんじゃん。しかも、私が誕生日にあげたヤツだ。

「傘、持ってるのに、なんで雨宿りしようって言い出したの？」

私が尋ねると、委員長は少し考えこんだ。

「たまにはゲームセンターで遊んでいこうかと思って。それに……」

彼は一度言葉を切り、こちらを見つめて続けた。

「新見さんをデートに誘ってみたかったんだよ」

飄々（ひょうひょう）とそんなことを言われて、私が動揺するとでも思うのか。

委員長を半眼で見つめ返すと、彼はからからと笑った。

「冗談だよ。……この傘を持ち歩いてるの、新見さんに見られたら、ちょっと気まずいなって思っただけ」

それは先ほどの言葉よりも、よほど照れくさい一言だった。

「気に入ってもらえたなら、嬉しいけどな？」

「……新見さんは真顔でそう言うだろうと思ったから、知られたくなかったんだよ」

そっぽを向いた委員長は、今度こそ耳が赤かった。

□■□

席替えをした翌日ではあるが、早くも新しい席に慣れつつある。
今は昼休み。私は裕美ちゃんと一緒に、教室でお弁当を食べていた。
「そういえば夏休みに話したこと、覚えてる？　教会の噂」
ふと思い出したように、裕美ちゃんが尋ねてきた。
「ああ……。探検に行った生徒が、帰ってこなかったっていう？」
ちょっとした怪談みたいな話だ。
「あれね、A組の男の子たちなんだって。行方不明になって、警察にも捜索願を出したとか。祭さんが言ってた」
「ホントに教会に行ったの？」
「そこは、分かんないみたい」
「そんな噂があったら、警察だって教会を捜索してるだろうし……、それで見つかってないなら、別の場所にいるんじゃないかな」
それにしても、捜索願なんて穏やかじゃない。京子嬢から詳しい話を聞けないかと思って、私は教室を見回した。しかし、京子嬢の姿は見当たらなかった。そういえば、マリア嬢もいない。二人はお弁当を一緒に食べているはずだから、今日は外で食べているのかな。

そう考えていると、デザイナーくんが話しかけてきた。
「それ、迷惑な話だよねー。あの教会には日曜の礼拝で何度も行ってるけど、別に怪しいとこなんてないのにさあ」
どうやら、私たちの話が聞こえていたらしい。教会の十字架が気に入っているという理由でこの学園に転校してきた彼にとって、腹の立つ噂話なのだろう。
デザイナーくんはむくれたように口を尖らせ、私と裕美ちゃんのお弁当を摘んでいく。おい。
「だいたい夏休みでしょ？　男がちょっと帰ってこなかったからって、心配するもん？女の子とめくるめく逃避行に出かけて、戻りたくないだけかもしれないのに」
「いや、それはそれで問題でしょ。新学期がはじまってるのに」
私は呆れて言った。デザイナーくんのフォローは、ちっともフォローになっていない。
「オレが運命の女の子に出逢ったら、学校なんてどうでもよくなると思うけど？」
デザイナーくんの発言には、いささか問題がある。しかし、裕美ちゃんはうっとりしながら言った。
「火村くんは情熱家なんだねえ」

どうやら彼女の好きな乙女ドリームな世界では、それもありのようだ。
「まぁ問題は、運命の女の子がなかなか見つからないことなんだけどね。ねえ、裕美ちゃんはどう？　オレの運命の女の子になってみる気、ない？」
「私、気の多い男の子って、対象外なの」
先ほどの態度とは打って変わって、裕美ちゃんはキッパリ断った。
「ちぇっ。キミたちって、このクラスで一番手強いよねえ。日曜日にも来てくれないしさ」
デザイナーくんは新しいデザインのヒントを得るために、隔週日曜日に会合を開いている。参加者は、デザイナーくんファンの女の子たち。彼は男女問わずに誘っているが、実際に行くのは女の子だけだという。私と裕美ちゃんも、誘われたことがある。顔を出したことはないけどね。
「日曜日は忙しいからムリ」
またも裕美ちゃんは、バッサリと切り捨てた。強いな、裕美ちゃん。
その時、京子嬢が会話に加わってきた。
「火村くん、フラれちゃったわね」
そう言って、面白そうに笑っている。マリア嬢も一緒だ。どこへ出かけていたのかは分からないが、戻ってきたところらしい。二人と入れ替わるようにして、デザイナーくんが離れていった。他の子のお弁当を摘みにいったのだろう。彼は毎日、いろんな子の

お弁当を味見しているのだ。
ナイスタイミングである。せっかくなので、私は京子嬢に教会の噂について尋ねることにした。
「夏休み中に、裕美ちゃんから聞いたんだけど……」
私が切り出すと、京子嬢はシリアスな表情を浮かべて、噂の詳細を教えてくれた。
どうやら怪談話と、Ａ組の生徒が行方不明になっていることは、別件であるらしい。
「あの教会に何か秘密があるっていうのは、前からあった噂なのよ。時々、ヴァイオリンが聴こえてくるのも怪談っぽい要素だったし」
そのヴァイオリンを弾いているのは、月島美少年だ。みんなは知らないようだけど。
「あの教会には住み込みの神父がいるはずなのに、普段、彼の姿がまったく見えないの。日曜の礼拝には出てるそうだから、そこまで怪しくはないんだけどね。それでＡ組の男子生徒四人が、夏休み前に教会を探検しようって話をしてたんだって。とはいえ、本当に教会に行ったのかは分からないみたい」
「探検するほど大きな教会だっけ、あそこ？」
私が尋ねると、京子嬢は首を横に振った。
「ううん、むしろ小さい建物よ。でも関係者以外立ち入り禁止の場所だから、入ってみたくなる気持ちは、よく分かるわ」

それは、確かに。男の子たちの好奇心を煽りそうだよね。
「四人が行方不明になってるのは、本当よ。ただ、教会は無関係だと思う。大人たちは、何か事件に巻きこまれたんじゃないかって話してるわ」
そう言って、京子嬢は腕を組んだ。
「まぁ、教会は一度取材してみたいと思ってるんだけどねー」
さすが報道部。私が感心していると、マリア嬢は不安そうに口を挟んだ。
「う、うーん。危ないかもしれないから、やめておいた方がいいんじゃないかなあ……行方不明者の噂がある場所なんだし……。本当に無関係かは、分からないじゃない？」
マリア嬢にとって、教会は月島美少年と遭遇できる場所。あまり好奇の目が向けられるのは、避けたいのかもしれない。
「マリアってば、こういう時、絶対に乗ってくれないわよねえ。ま、残念だけど諦めるかな」
京子嬢はそう言って、肩をすくめた。けれど彼女の目がきらりと光ったような気がして、私は嫌な予感を覚えた。

翌日、京子嬢は学園に来なかった。
朝礼の際、京子嬢が席に座っていないことに気がつき、私は眉を寄せる。裕美ちゃんも同じことを考えていたのか、心配そうな表情を浮かべて、私の席を振り返った。

あんな噂話をしていた翌日だ。体調不良で欠席しているのならまだいいが、疑問は残る。
和兄は首をかしげてマリア嬢に尋ねた。
「祭から欠席の連絡がないんだが……愛川、おまえ仲がいいだろう。なんか聞いてないか？」
「え、ええっと……。風邪を引いて休むって言ってました」
マリア嬢はしどろもどろになって答えた。怪しい。
「そうか。病欠なら、ちゃんと連絡してほしいもんだな……。まぁ仕方ない、後で自宅に電話してみるか」
和兄はそう言って、朝礼を終えた。それからすぐに別の教師が現れて、一時間目がはじまってしまった。授業中、私は京子嬢のことが気になって仕方なかった。
一時間目が終わると、すぐに裕美ちゃんが私のもとへ走ってきた。顔が真っ青である。
「し、ししししし、詩織ちゃん。まさか」
私はひとまず裕美ちゃんを落ち着かせ、一緒にマリア嬢の席に向かった。
「愛川さん。京子ちゃんから風邪の連絡があったって、本当？」
マリア嬢の顔色も悪い。私の質問に、少しうつむきながら答えた。
「明日、来なかったら風邪だって伝えてくれって……昨日の帰りに頼まれたの」
……やっぱり。もしかしたら、京子嬢の身に何かあったのかもしれない。

「ど、どうしよう。まさか京子ちゃん、一人で教会に行ったんじゃ……」

くっ、マリア嬢、あなたが動揺してどうするのだ。

彼女が取り乱しているということは、これはゲームのイベントとは関係ない出来事なのだろう。私は、ゆっくりと深呼吸をした。大丈夫、大丈夫。私は冷静。新見詩織は冷静な女だ、うん。

「教会に行ったとしたら、昨日の放課後だよね。家に帰ったかどうか、自宅に確認できる？」

私は京子嬢の自宅の電話番号を知らない。マリア嬢と裕美ちゃんに尋ねると、二人は首を横に振った。

「となると、日比谷センセーに確認をお願いするしかないか……」

私がそう呟いたとたん、マリア嬢は顔を上げた。これは、何かを思いついた表情だ。先ほどまで青ざめていた顔に、少しだけ赤みが差す。

「わたし、聞いてくる！」

……早い。一目散に駆け出していったマリア嬢に、私は唖然とした。

「よっぽど祭さんのこと心配なんだね……」

裕美ちゃんは感心したように言ったが、果たしてそうだろうか。攻略対象である日比谷教師と会話するチャンスに、喜んでいたのでは……？　切り替え早いぞ、まったく。

数分後、私の携帯電話に、和兄からメールが届いた。マリア嬢はまだ戻ってきていない。

『夏に、肝試しのイベントがあったはずだ。祭が取材に行ったきり帰らないのを心配し、火村と一緒に探しにいくという内容だ。夜、二人が抱き合っているイラストを覚えている。ゲーム中では、七月から八月に起きるイベントだったと思う』

……うがぁあああああ。乙女ゲーム世界、鬱陶しいいいいいい！

あんなに心配したというのに！　私と裕美ちゃんに謝れ！　こんちくしょう！

まぁ何はともあれ、これがイベントだとすれば、京子嬢はたぶん無事だろう。ただ、現実のこの世界では、イベントの内容がゲームとは異なることもあるようだ。夏祭りで私は怪我をしたが、本来は負傷するイベントではなかったと聞いている。よって、早めに動いた方がいいだろう。

嫌がらせでイベントを潰してやりたい気持ちにもなったが、それで京子嬢に何かあっては困る。やめておこう。

肝試しというと、夏の夜の定番イベントである。なぜ新学期になってからイベントが発生したのかは、分からない。まぁ夏にあった合宿のイベントだって、ゲームではＧＷに発生するものだったのだ。そういうこともあるのかもしれない。うん、とりあえず今が夜じゃなくて良かった。

職員室にダッシュしたマリア嬢は、予鈴が鳴った瞬間、教室に戻ってきた。そのため、

京子嬢について聞くことはできなかった。
「日比谷センセから聞いたんだけど、京子ちゃんは昨日、一度家に帰った後にまた出かけたんだって」
マリア嬢がそう報告してきたのは、昼休みである。……遅いよ！　休み時間のたびに彼女はどこかに出かけていたので、私と裕美ちゃんは、ずっと京子嬢の心配をしていた。
気を取り直して、私は尋ねる。
「行き先は？」
「誰も知らないみたい」
ゲームでは、どういう内容だったんだろう。尋ねたいところだが、私がマリア嬢の秘密を知っていることはもちろんナイショである。私は素知らぬふりを装って確認した。
「警察には、もう届けたのかな？」
「今日の夜まで連絡がなかったら、届けるつもりだったらしいの。日比谷センセがおうちの人に聞いた限りだと」
「京子ちゃんの携帯電話は、向こうが出ないだけで、電源が切れてるわけじゃないんだよね？」
「うん」
マリア嬢がこくりとうなずく。

「なら……」
私は一つ深呼吸をしてから、提案した。
「教会にいるかどうか、明るいうちに探しにいけばいいよね」
私の言葉を聞いた瞬間、マリア嬢は目を丸くした。
おそらくイベントでは、放課後になってから、デザイナーくんと一緒に京子嬢を探すことになっているのだろう。だが、それには役者が足りない。先ほどからこの会話には、デザイナーくんが加わっていないのだ。
「え、えっと……明るいうちって？」
マリア嬢は焦ったように尋ねてくる。
「だって、暗くなってからじゃ危ないでしょ？」
私の返答には、おかしなところなどないと思う。人を探すなら、日中の方がいいに決まっている。それに、今は昼休み。絶好の機会ではないか。
……暗くなってから教会に行くのが怖いわけじゃないからね？
「まだお弁当食べてないけど、急ごう」
私はそう言って、裕美ちゃんの顔を見た。彼女は、力強くうなずく。
マリア嬢が私たちと一緒に来るかどうかは分からない。もしかしたら私と裕美ちゃんも行方不明になって、結局、マリア嬢はデザイナーくんと夜に行動するのかもしれない。

だが、今は何よりも京子嬢のことが心配だった。
私と裕美ちゃんは、教会に向かって走り出した。すると、マリア嬢も少し遅れてついてくる。
教会にたどり着くと、裕美ちゃんは「はじめて来たよ……」と呟いた。
あちこちに修繕が必要そうな、古い建物である。周辺には木々が生い茂り、まだ昼だというのに薄暗い。
重厚な扉には、『関係者以外立ち入り禁止』の張り紙がしてあった。近づいてみると、扉が少し開いている。中に誰かいるのかもしれない。裕美ちゃんの方をうかがうと、青ざめた顔をしていた。
「電話、かけてみるね」
裕美ちゃんはそう言って、京子嬢に電話をかける。
プルルル、プルルルル、プルルルル……
耳を澄ますと、裕美ちゃんの携帯電話から、かすかに呼び出し音が聞こえた。
プルルルル、プルルルル、プルルルル……
しかし、一向に繋がらない。裕美ちゃんは、首を横に振った。
仕方がない。私と裕美ちゃんが教会に足を踏み入れた瞬間、弦楽器の音が鳴り響いた。それはいつか聴いた美しい音色ではなく、とても耳障りな音だった。裕美ちゃんが、耳

をふさいで膝をつく。
扉の正面にある祭壇の前には、一人の少年がいた。胸をかきむしりたくなるほど歪な音を立てている彼は、この世のものとは思えないくらい美しい。
「ひっ……」
美少年がゆっくり顔を上げると、裕美ちゃんは短い悲鳴を上げた。
「優希くん……！」
背後からマリア嬢の声が聞こえる。祭壇の前にいたのは、ヴァイオリンを手にした月島美少年だった。
「ムカツキ女。それに……ナマイキ女じゃん」
月島美少年は私を見て、ぎこちなく視線をそらした。ムカツキ女って、私のことかよ。腹の立つあだ名だなあ。ちなみにナマイキ女とは、マリア嬢のことである。
「どうして、こんなところに？」
マリア嬢は私たちを追い越して、月島美少年のもとに向かう。
「そっちこそ」
「わたしは人探しに……。ううん、それよりも今の音。どうかしたの？」
月島美少年と会話をはじめてしまったマリア嬢は置いとこう。京子嬢はどこにいる？
教会内を見回すと、床に座りこみ、壁に寄りかかってすやすや寝ている京子嬢を発見

した。なんでこんなところで寝ているんだろう。
「京子ちゃん、大丈夫？」
ゆさゆさ揺らしても起きないので、少々不安になる。寝息もしっかり聞こえてくるし、ただ寝ているだけだよね？　まぁとにかく、見つかって良かった。
ホッとした私は、裕美ちゃんに声をかける。
「保健室に連れてこう。背負うから、手伝ってもらってもいい？」
「う、うん……。でも、詩織ちゃん一人で平気なの？」
しかし、今のマリア嬢に声をかけたところで、聞こえないだろう。彼女は月島美少年に夢中だ。もしかしたら、これもイベントの一つなのかもしれない。
二人は放っておいて、早いところ京子嬢を連れ出そう。
「っっ！」
裕美ちゃんの手を借りて京子嬢を背負おうとすると、全身に鋭い痛みが走った。……夏祭りの怪我（けが）の影響だろうか。女子一人くらい、運べると思ったんだけど。
私が床に崩れ落ちると、いつの間にか月島美少年がこちらを見ていた。
「まだ怪我、治ってないんだろ」
彼は顔をしかめながら呟（つぶや）き、マリア嬢にヴァイオリンを差し出した。
「ナマイキ女、これ持ってて」

マリア嬢は、驚いた顔でヴァイオリンを受け取る。
よく見たら、弦が一本切れているではないか。よほど激しく弾いていたんだろう。とはいえ、さっきの演奏は、どうかと思うけど。
「なあ、ちょっと」
月島美少年は私の目の前で膝をつき、京子嬢を指差した。
「そいつ、背負ってやるから、寄越せ」
正直なところ、彼のような小柄な男が、ひと一人を背負えるとは思えなかった。
しかし、月島美少年は京子嬢をひょいっと背負い上げると、思いのほかしっかりした足取りで歩き出す。さすがに男の子なだけあるな。私たちも、その後に続いた。
「あの、優希くん。その手はどうしたの？」
マリア嬢が戸惑ったように尋ねる。その時はじめて、私は彼の手首に湿布が貼られていることに気づいた。
「もしかして、夏祭りの時の怪我？　まだ治ってないの？　だったら、私も手伝って――」
マリア嬢が最後まで言い終わらないうちに、月島美少年は口を開いた。
「念のため。もう痛くもないし、ヴァイオリンを弾くのにも支障はない」
彼の返答に、マリア嬢は「そう……」と呟いた。
その後は特に会話も盛り上がらず、保健室に到着した。

立ち読みサンプルはここまで

「ありがとうね」
京子嬢を保健室のベッドまで運んでくれた月島美少年に、私はお礼を述べる。
すると彼は、「別に」と言って背を向けた。そのままマリア嬢からヴァイオリンを受け取り、保健室から立ち去ろうとする。私は京子嬢の様子を尋ねようと、保健室の鈴木おばちゃん先生に向き直った。
「あのさあ」
入り口から聞こえたその声に振り返ると、月島美少年は顔をしかめて、保健室の扉の前に立っていた。
「あんた、女なんだから。これ以上、傷作ってんじゃねえよ。いろんなことに首を突っこんでくんな。すっげえ、心臓に悪い！」
吐き捨てるようにそう言って、彼は走り去る。
そんなこと、言われても……
マリア嬢は廊下に出て月島美少年の後ろ姿を見送り、保健室に引き返してきた。
うん、今はそれより、京子嬢である。しかし――
「新見さん、あなたねえ……」
鈴木おばちゃん先生は月島美少年の言葉を聞き、私がまたも怪我をしたことに気づいてしまった。制服の下に隠した包帯もバレて、彼女は呆れ果てたように首を振る。うう、

なんて鋭いんだ。鈴木おばちゃん先生は、鬼の形相で言った。
「いい加減に懲りなさい。今度は何があったっていうんですか!?」
「い、いや、その。夏休み中のことなので、ご勘弁を」
「だったら、怪我なんてしないでちょうだい！　仮にも女の子なんですよ!?」
いや、ホント、ご心配おかけしてます。
鈴木おばちゃん先生は、大きく息を吐き出した。
「とにかく、気をつけなさいね。それより、念のため救急車を呼んだ方がいいわ。彼女、寝ているだけに見えるけど……何かあっても困るもの」
鈴木おばちゃん先生が救急車を呼んでいる間に、昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴った。京子嬢は心配だったけれど、午後の授業がはじまってしまう。私たちは、慌ただしく教室に戻った。

翌日、京子嬢は元気な姿で登校した。彼女は病院に運ばれてすぐ、目を覚ましたらしい。外傷などは一切なく、睡眠薬を飲まされて眠りこんでいたそうだ。
「あまりよく覚えてないのよ。家に帰った後、学園に向かって……。教会に着いたら、頭がもやもやっとしたの」
「それで？」